

川上ダムに頼らない治水対策

伊賀・水と緑の会

伊賀市桐ヶ丘 佐藤 保彦

1. はじめに

国土交通省は平成17年7月1日に計画中の川上ダムは利水機能の一部を残し、治水ダムとし、規模を縮小して建設することを決めたと発表した。

一方で、淀川流域委員会資料（事業中のダムについての意見書）（以下委員会資料という）の中で、川上ダムの主たる目的は岩倉峡上流上野地区の洪水調節であると述べている。

このような中で、同省近畿地方整備局の河川管理者提供資料（平成17年8月24日）によると、①岩倉峡の疎通能力、②洪水調節効果、③遊水池の越流提諸元の検討について補足説明がされている。

このうち、①、②について、月ヶ瀬滋章の会浅野氏の川上ダム治水無用論（以下浅野資料という）や委員会資料により検証を行なう。

2. 岩倉峡の疎通能力

木津川上流河川事務所は最近まで、島ヶ原測定実績流量のピーク流量一横入河川ピーク流量等で、 $2900 \text{ m}^3/\text{sec}$ が岩倉峡の疎通量であると説明してきた。

また、平成5年作成の観測流量表で不等流として計算された流量が水位10.5mで $630 \text{ m}^3/\text{sec}$ と記している。浅野資料によると、上野遊水池（総流量 900 万 m^3 ）が完成し、その周囲の堤防高さがE. L139.0mであるので越流提平均高さをE. L136.6mにとし、岩倉峡入口部の水位を計画洪水水位E. L136.6mに抑え、岩倉峡狭窄部の流量を検討している。川幅約70m、水深11.6m（最深部）、河床勾配0.005等を設定条件とし、疎流量は $4223 \text{ m}^3/\text{sec}$ 以上としている。

3. 洪水調節効果

既往最大規模の洪水は岩倉地点で高水量 $3532 \text{ m}^3/\text{sec}$ 、また、島ヶ原地点での高水量は $3619 \text{ m}^3/\text{sec}$ となっている。これらに前記の疎通量を照合してみると

①：浅野資料の場合・・・ $4223 - 3619 = 604 \text{ m}^3/\text{sec}$ 以上の余裕である。

②：平成5年不等流の場合・・・ $3630 - 3532 = 98 \text{ m}^3/\text{sec}$ の余裕あり。

③：昭和28年9月25日の実績？の場合・・・ $2900 - 3532 = -632 \text{ m}^3/\text{sec}$

cc

③の場合、上流側へのバックウォーターとなる（全逆流量、3日で約683万 m^3 ）が遊水池容量は900万 m^3 であり氾濫は全く無い。

以上の結果で対象地区の治水対策は満足されると判断される。

さらに上乘せした治水対策として、委員会資料による水田活用（休耕田も含む）案や堤防補強と併せた河床掘削・拡幅・河道内障害物の除去等を行なう河道改修による流下能力増大案も検討の対象となり、より洪水調節効果が期待できる。

4. おわりに

委員会資料によると、ダム建設は基本的に自然環境に対して明らかに負の影響をもたらすもので、治水・利水の効果が自然環境に及ぼす負の影響にもまして、人間生存に不可欠と認められる場合にのみダム建設が容認されるとしている。

川上ダムの建設はオオサンショウウオやオオタカをはじめとする多様な生物の生息環境の破壊等、ダム周辺の豊かな自然環境に重大な負の影響を及ぼす恐れが懸念されることや、木津川の砂礫河床が河川水質の浄化機能に大きく関わっていることが明らかにされており、河川保全の観点からも配慮を要するとしている。

これからの治水対策は、森林整備、堤防強化と併せて、河道整備等を推進し、環境への負の影響を減らす姿勢が望まれる。

以上、これまでの検討内容により、上野地区の治水対策は川上ダム以外の方法である遊水池やその他の施策によって充分満足な結果が得られると判断するものである。

以上